

## 付録：シュペート哲学の概説（翻訳）

「第1部」の「3-2.各時期の思想の特徴」において我々は、シュペートの思想の全体像を暫定的に提示した。その際資料として、シュペート哲学を簡略に説いた以下の二つの文章を利用した。参考までに、ここにそれらを訳出しておきたいと思う。

第一に挙げられるのは、シュペートが自身の哲学を解説した短文である。これを彼は百科事典『グラナート』の一項目として1929年に執筆した。だが、事典の編集者はこの原稿をそのままでは採用せず、それに修正を施したものを事典に掲載した（1932年刊）<sup>1</sup>。このため、我々は長い間、改竄版にしか触れることができなかつたのだが、1992年、A.A.ミチューシンがついにオリジナル原稿を雑誌上で公表する<sup>2</sup>。こうして、ようやく我々は本物の「シュペートによるシュペート」を読むことができるようになった。ここで訳出されるのは、このオリジナルの方である。

次に示されるのは、シュペートの学生時代からの友人で、物理学者・科学哲学者のA.I.バチンスキー（А.И.Бачинский）が、ソ連科学アカデミー新会員選出の際（1928年の秋から1929年の初め）、シュペートを哲学部門のメンバーに推挙すべく、アカデミーに送った文章である。この一文を雑誌上で公表したのもミチューシンである。彼はこれをシュペートの教え子のアーカイヴズで見つけたと言う（ただし、それはオリジナルではなく、コピーであった）<sup>3</sup>。

以上の二つは、シュペート自身、そして彼の思想をよく知る親しい友人によって書かれた文章であるという点において、他の類似の文章（例えば、最近のロシアの哲学事典における「シュペート」の項）とはまったく異なっており、いうなれば一次文献である。それゆえ、未だほとんど明らかになっていない彼の思想の全体像を描こうと試みる際の資料として、これらは今のところ最も適当であると言えよう。

<sup>1</sup> Шпет // Энциклопедический словарь «Гранат». 7-е изд. Т.50. М.-Л., 1932. с.378-380.

<sup>2</sup> Шпет Г.Г. Шпет. (Статья для энциклопедического словаря «Гранат») // Начала. 1992. №1. с.50-52.

<sup>3</sup> 問題の文章は次の論文の付録として公表された。

Митюшин А.А. Творчество Г.Шпета и проблема истолкования действительности // Вопросы философии. 1988. №11. с.93-107. [// Философия не кончается... Из истории отечественной философии: 20 век, 1920-50-е гг. М., 1998. с.350-374.]

また、同文書は次の著作にも付録として（1139-1141 ページに）収められている。

Шпет Г.Г. История как проблема логики. Критические и методологические исследования. Материалы. В двух частях. М., 2002.

## A) G. G. シュペート「シュペート」(百科事典『グラナート』の項目)

哲学はその内的発展において弁証法的に次のような三つの段階、すなわち、知恵、形而上学、厳密な学という三段階を経る。だが、哲学は根本学であり、いわゆる「科学的哲学」とは異なる。科学的哲学は諸々の部分的な科学に基づいており、物理学主義、生物学主義、心理学主義等といった否定的な諸潮流を生み出す。カントの認識の理論は形而上学を克服することができなかったが、同様に後の哲学も否定と否定主義に怖じ気づき、カントのジレンマ、すなわち、認識は自然を写しとるのか、自然に諸法則を付与するのか、というジレンマを解決することができなかった。観念論や唯物論はジレンマの項の一方を受け入れるわけだが、まさにそのことによってジレンマを承認している。ジレンマの解決策は「第三の可能性」の探究のうちに存する。「批判的実在論」におけるジレンマ両項の折衷主義的な承認は益するところがなかった。現実的な解決策は分割の全体を、したがってジレンマの両項を拒否することに、そして、上の分離に先行する第三の可能性を指摘することに基づく。この方向へと歩を進め始めたのがドイツ観念論哲学であり、それはヘーゲルその人において我々が受け入れることのできる成果をあげたが、しかし、これはただ形式的に、であった。というのも、ヘーゲルもまた、自身が見出した「同一的」契機を絶対的な形而上学的実在性へと捏造せずにはいられなかったからである。フッサールは自らの概念「理念視」ないし本質観取によって、ジレンマの原理的な克服へと我々を立ち返らせた。ブレンターノの志向性概念、および意識の対象性に関するフッサールの命題をシュペートは受け入れる。しかし、彼はフッサールが知覚の向こう側に原的な所与性を認めることのうちに自然主義の危険を、そして、意識の統一として「純粹自我」を認めることのうちに超越論主義の危険を見ている。たとえ我々が、直接経験に基づきつつ、反省を用い、還元という方法を用いて、意識の哲学的分析と批判に実際に到達することができるとしても、我々はそうした経験を、「物」の知覚といったその経験の抽象的な形式においてではなく、文化的・社会的な経験というその経験の具体的な充実においてつかみ取っているはずである。一方、「私は意識を有する」ということがたとえ正しいとしても、このことから意識は「私」のみに属するという事は帰結しない(「意識は所有者を持たないでいられる」)。なぜならば、集合的な意識というものの諸形式が存在しえるからである。文化的・社会的な意識の諸形式は、物の知覚においてではなく、社会的交流の記号の習得において原的に与えられる、言葉=概念からなる。

概念の伝統的論理学にとってベルグソンの批判は仮借のないものであった。生きた概念は、その質料的な担い手である言葉に立脚しており、単なるコンセプトとしてではなく、流れ行く意味の具体的な統一として我々に捉えられている。意味の観取とは理解であり、それは感覚的知覚と同様に直接的である。そして、ここにシュペート哲学の中心問題が存する。言葉の内部諸形式は、彼によって諸々の概念を形成する規則と定義されているが、しかし、この規則は公式ではなく、アルゴリズムである。言葉の内部諸形式は、意味の流れに形を与えるにとどまらず、言葉において表現された実在性を或る特殊な弁証法的解釈に付する可能性を開いてもいる。この解釈は意味の運動におけるあらゆる可能性を開示し、こうして哲学は文化の哲学、つまり実現しつつある可能性の運動となる。具体的な現実の実在性とは、具体的な現実の実在化である。実在化は根拠(ratio)を前提とし、この根拠のゆえに、他の可能性ではなく、当の可能性が実現している。新

実在論は正しくも諸々の感覺的質の実在性を擁護しているが、しかし、それはそれら感覺的質の推定に実在性の問題が収まると主張する点で誤っている。真に実在性を有するのは、究極的で具体的な文化的・社会的経験のみである。述定が論理的な内部諸形式を通じて認識されるものの意味と現実を刻み出すのと同様に、準述定的な諸形式においては、芸術という遊離した諸領域が確定される。そこでは芸術的な内部諸形式が美的知覚のアルゴリズムである。

各々の社会的・文化的な事実は、言葉に似て、意義を有しており、したがって弁証法的解釈に服する。しかし同時に、言葉に似て、社会的・文化的な事実は、それにおいて自らを客観化している諸々の主観—それらは人格的であり、かつまた民族、階級、時代等々、集合的でもある—の表現者である。この豊かな表現力において社会的な記号は心理学的な分析と研究（社会的・民族的な心理学）の客体たりうるが、ただし、ここで心理学的なものとなるのは、主観の反応である。主観は自らの環境や状況において生存し（「社会的相対主義」）、その環境に対して、またその環境を通じて自然や歴史という周囲の現象に対して、反応するのである。

別に、ロシア哲学史に関するシュペートの著作がある。

#### 主要著作

『現出と意味』（1914年）

『論理学の問題としての歴史』第1巻（1916年）

『意識とその所有者』（1916年）

シュペート編集の年刊誌『思想と言葉』（1917-1921年）所収の諸論文（「知恵か理性か」、「懐疑主義者とその心」、「ジョベルティエの哲学」）

『ゲルツェンの哲学的世界観』（1921年）

『ラヴロフの人間学主義』（1922年）

『美学断章』第1部、第2部、第3部（1922-1923年）

「芸術としての演劇」（1922年）

『民族心理学序説』第1部（1927年）

『言葉の内部形式』（1927年）

1929年6月19日執筆

#### B) A. I. バチンスキー「ソ連科学アカデミー御中」

精密科学と哲学研究との間には深い連関が存するが故に、わたくしは精密科学の代表者として、ソ連科学アカデミー哲学科の人員交代問題に関して、自身の意見を述べなければならないと存じます。

公式に氏名が発表されている候補者の中には、グスターフ・グスターヴォヴィチ・シュペート

の名が挙げられています。わたくしはシュペートの学問業績の特質を敢えて推す者であります。わたくしの見解では、シュペートの学問業績の特質は、彼を候補者として、哲学研究部門のリストに載っている者たちのうちで最も有力な者とするのであります。

シュペートによると、哲学はその歴史的で弁証法的な発展において次のような三つの段階を通過します。すなわち、1)「知恵」と道徳の段階、2) 形而上学と「世界観」の段階、3) 厳密な学の段階であります。

我々の時代の課題をシュペートは、学としての哲学の実現とみなしています。そのためには、第一に、(神話的で形而上学的な構築物と異なり) 哲学の肯定的な内実を成しているすべての契機を哲学史において浮き上がらせて見せなければならず、第二に、それら肯定的契機に立脚しながら自身に特別の対象と方法に規定される哲学的知の体系を打ち立てなければなりません。疑似的な学である形而上学理論は、内的に矛盾しており認識によって解決することができないことが哲学的に証明可能であるような問題に取り組むか、あるいは専門的諸学に似せて組み立てられるかでありました。この後者の場合、形而上学理論は、一方では厳密な学知の領界を超えて検証不可能な仮説へと至り、また他方では自分の気にいる専門的学から類推した一面的「世界像」を作り出しました(ここから機械論、生物学主義、心理学主義等が生じたのです)。知そのものと知の条件の研究に向かうことによって、哲学における形而上学を克服せんとする実証主義やカント認識論による試みは、シュペートが論証しているように、その批判的な部分においては我々にとって甚だ有益でありうるものの、その創造的な部分においては現象主義、主観主義、および懐疑主義を歴史的にもたらしました。その一方で逆に、学としての肯定哲学は、(シュペートによってその著作で説得的に示されているように) 実在論、客観主義、および理性主義によって特徴づけられるのであります。

一面的で仮説的な「世界像」に抗してシュペートが哲学に要求するのは、意識の諸々の統合形式—それらは諸学、芸術、言語等々という文化的・歴史的事実において実現されているのですが—それらの明晰で厳密な分析であります。これに関連してシュペートの哲学体系は、論理学、美学、哲学的意味論等々という専門的諸学へとまとめ上げられています。現在に至るまで主要な関心を彼は(教授活動においても、著述活動においても) 次の二つの専門的学の問題へと向けています。すなわち、論理学(これを彼は学的知の方法論と解し、学的思考の歴史との関連で論じています)、および美学(これを彼は具体的な芸術学へと方向づけています)であります。論理学の領域においては、論理学および歴史的諸学の方法論に関する彼の専門的研究は、専門家たちの間に特別な関心と承認を呼び起こしました。それゆえ彼の業績に対する一連の非常に高い評価を引用することもできましょう。美学の分野でも、シュペートは同様に、一般的原理の宣言にとどまるのではなく、学的哲学の方法を言葉の芸術の研究へとすぐさま応用して見せました。それでもやはり、この分野における彼の研究は美学の境界をはるかに超えており、独創的な言語哲学の根拠づけを行っているのです。この後者の原理は彼の直接の教え子たちによって発展させられているばかりでなく、ロシアの若手言語学者たちに顕著な影響を与えています。そのため、そこでは正しくも「シュペート学派」について論じられているのです。シュペートの最新の著作に関する大きな論文の著者による指摘、すなわちシュペートの研究は西欧の学問研究の最近の潮流とパラレルな関係にあるという指摘は、正当なものと認めなければなりません。しかしながら、ぜひ

とも付け加えておかなければならないのは、その分野における枢要な思想は、シュペートによって、彼と考えを同じくする西欧の者たちの発言よりずっと早く表明されていたし、また、彼の仕事の成果はより一層生産的で、西欧の学者たちのいまだに遠慮がちな実験と比較するとはしばしば遙かに先の所まで行っている、ということであります。専門的諸学が現実の物や事実を研究している一方で、哲学はほかならぬ学的方法と概念の批判や分析を課題としていることを論証しながら、シュペートは自らの哲学的方法を「学的概念の解釈弁証法」と規定します。学の理論や術語の意味そのものの弁証法であるこの思考法は、プラトンやヘーゲルの弁証法という形式的で抽象的な思考法と異なり、真に実在的な弁証法と呼ばれなければなりません。著名な数学者（かつ）論理学者であるボルツァーノの定義を支持しながら、シュペートは「学の方法」を証明と叙述の方法という意味に解し、どのような経路を経て学者が学的真理に接近するにせよ、その真理が適切な形で叙述される、すなわち基礎づけられ証明されるそのときに学は始まるのである、と正しくも考えています。ここからシュペートの解釈弁証法は、学の理論や方法や手法の意味そのものを、それらの歴史的論理的な文脈において分析することへと拡大するのです。シュペート自身の分析がこの方法の応用の模範であります。彼の並々ならぬ博識や繊細で洗練された分析技法と共に、それらの分析は彼をして哲学研究の現代の代表者たちの最前列に位置せしめているのです。

解釈弁証法という方法を応用した結果の一つとしては、術語の意義を分割することによって達せられた、哲学の諸学説の区別をここで挙げるができます。この区別は、それら術語の相互関係、および文化的思考全体の中でそれら術語が占める場に対して光を当てるものであります。諸概念の中にそれら術語の客観的意義と主観的・心理学的表現を区別することによって、シュペートが示して見せるのは、哲学の歴史のうちには、客観的理論と共に、特別な型の気分や心理学的気質を反映するのみである特殊な社会心理学的構成物が編み込まれてもいるということであります。この観点からなされた懐疑主義に関する彼の分析は模範的なものであると専門家たちによって正当にも認められています。

当然のこととしてシュペートは、学的な価値と文化史上の意義に応じて、肯定哲学の学説を、一方では形而上学的な構築物から、他方では社会心理学的な構築物から区別することによって、当の哲学史に新たな独創的な仕方で照明を当てています。この点において模範と言えるのが、彼のロシア哲学史研究（これほど大規模に入念に記されたのは初めて）なのですが、今のところまだ、これの第一巻、および第二巻のための準備的な習作数点のみが公刊されただけです。類まれな博識のおかげでシュペートには、以前には思いもよらなかったロシア哲学の源泉を明らかにすることが可能でしたし、そればかりでなく、西欧哲学史においてあまり研究されていない忘れられた局面に照明をあてることも可能でありました。現在予定されているシュペートの著作のドイツ語版の出版によって、西欧世界は彼を第一線級の研究者の列に加えざるをえなくなると考えねばなりません。ロシア哲学史に関するシュペートの著作がアカデミーの研究条件において完成することは、わが国の学問研究にとって非常に有益なこととなりましょう。

別に言及しなければならないのが（とはいえ、それは彼の原理と内的に結びついてはいますが）、社会・民族心理学に関するシュペートの著作であります。それら著作の理論的価値（批判としての価値、肯定的な建設的意見としての価値、これら両方）以外にさらに、それら著作が、わが国でかくも発展しつつある地誌研究や連邦内居住民族の研究と関連して、現代の学問研究に対して

甚だ大きな実践的意義を有すること、これを強調しないではおれません。この分野でもやはり、公刊されたのは今のところまだ（非常に独創的で大胆な）原理の叙述に当てられたシュペートの初発的研究のみです。しかしながら、モスクワの学会においてシュペートがすでに行った複数の報告からして、この分野でも彼の仕事は十分に前進しており、ついにはアカデミーの水準での完成を見るだろうことは明らかであります。

卓越した講師としての、また並外れた組織者としてのシュペートの個人的資質にわたくしが触れないとすれば、彼の学的功績の概観、そして彼の業績の学的意義の評価は不完全なものとなりましょう。彼によって創設された民族心理学研究室、また科学的哲学研究所や国立芸術学アカデミーの前の哲学部門（現在の一般芸術学・美学部門）の組織運営、これらが十分に証明しているのは、シュペートこそ、ソ連科学アカデミーが新たな哲学科の組織運営に関する課題（かくも責任重大な、わが国の学問研究にとって重要な課題）の遂行を委ねうるだろう唯一の候補者であるということなのであります。そして、学的関心の超広域性と絶大な博識によって、間違いなくシュペートは科学アカデミー全体の業務へのかけがえのない参加者となることでありましょう。